

巻頭言

朴 成和*

抗がん薬の開発は、21 世紀に入って多くの分子標的薬が臨床導入されたが、最近では免疫チェックポイント阻害薬が主役であるといえる。

これまで消化器がん領域においてもさまざまな分子標的薬の開発が試みられたが、ほかのがん種にみられるような driver mutation とマッチした薬剤のように劇的な効果のある分子標的薬は開発されていない。この一因として、消化器がんでは、喫煙や *Helicobacter pylori*、肝炎ウイルス感染などの長期間におよぶ環境因子が関与した複雑な発がん過程をとること、その結果腫瘍内での heterogeneity が存在することが考えられる。実際に消化器領域のがんでは、tumor mutation burden が比較的多い。

このような状況において、消化器がん領域において、がん治療の新たな扉を開いた免疫チェックポイント阻害薬に対する期待は大きく、さまざまながん種における比較試験の positive な結果が報告されつつある。実際に、免疫チェックポイント阻害薬が臨床導入されて以降、これまで見たことのないような効果を経験することも少なくない。しかし、効果の得られない患者が多いこと、効果を予測するバイオマーカーが確立していないことなど、さらなる効果増強のための併用療法の開発など新規治療の開発が待たれる。また、免疫関連有害事象への対応など、解決すべき問題が多い。本特集は、消化器がん領域における免疫チェックポイント阻害薬を概説しているが、読者の今後の診療や研究の一助になることを期待している。

Narikazu Boku

*国立がん研究センター中央病院消化管内科(〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1)